

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学紀要(一般教育)(2011.03) 第27号:73~80.

意識の構造(1)

田中 剛

意識の構造（1）

The Structure of Consciousness（1）

田中 剛
Tsuyoshi Tanaka

abstract

Our hypothetical schema for the structure of consciousness is based on the synchronistic and diachronistic (transactual) structure of conscious being. This means that the brain is an organism which winds and unwinds its own time.

We know that the phenomenological reduction (epoche) is a conversion of the subject itself, which breaks free from the limitations of the natural attitude by placing them “within brackets” (Einklammerung). It is not a simple purifying process of consciousness, because it suppresses neither the reality of lived experience, nor the reality of things, nor of nature. Consciousness thus does not exclude nature. It goes beyond nature.

In relation to the organization and construction of the self, it is important to note that the self stands at the center of our schema. As concerns the development of the self, it is in a state of constitutional heteronomy, it has no autonomy (S. Freud). The formation of the self, on the other hand, is reduced to its own lack of recognition, that is, a knowledge or a recognition which is refracted through the prism of another's image (J. Lacan). Lacan, as we know, described identification as the joyful assuming of one's own specular image. The self establishes itself in the function of a radical misconception or denial.

R. Magritte illustrated this situation by denying the laws of reflected mirror images. The use of converging lines for painting the Last Supper looks normal in the eyes of the viewer, but it gives us an imaginary viewpoint. Mach lies on his sofa and the body is only partly seen. The cognitive space is illustrated, but his phenomenal space is ignored.

キーワード: 意識の場

旭川医科大学医学部ドイツ語 e-mail: t344@asahikawa-med.ac.jp

0. David Chalmers はかつて「意識体験は物理的なものに論理的に付随しない、しかし自然的には物理的なものに付随している」と述べた。この見解が一定の影響力を内外の研究者たちに対してもち、その後賛同と批判の多くの論議が巻き起こされ、現在も終息したようには見えない。

本論は筆者が到達した現時点での「意識の構造」に関する認識を開陳するものである。ただし、関連領域が多岐にわたるため今回は次号への前段階として、仮説の基礎となる「意識現象」の具体的諸例と、構造的シエーマを構成する基本概念についての概説の提示にとどめる(本論の最終ページを参照されたい)。このシエーマは単なる幾何学的図形ではない。これに多くを語らせようというのが眼目である。

さて、私は前論文において「意識」を「心的有機体」と呼んだ。これはフランスの精神病理学者 Henri Ey がその著書のなかで彼自身の現象論的視点からの意味を込めて使用した概念であるが、私はここではその精神病理学的・生理学的な枠を離れ、この概念をさらに「直接経験の領野」という意味において「超越論的」に拡張して論じたい。

現状をいえば、「意識」あるいは「心」と称される概念が実に多くの小概念の混合物として巷に流布し、昨今の脳科学の流行に後押しされた形での哲学的議論や俗流心理学と結びついてその「思惟経済的な有用性」(Ernst Mach の言葉)をいたるところで発揮しているように見える。そこでなされる異なる立場からの個々の有用な洞察は幾冊もの「意識」に関する著書を生み出し、ある意味でわれわれの説得に成功し、われわれの認知を得ているものもあるといっても過言ではない。しかし、立場が異なればその論点が必然的にいかなる焦点へも収斂することなく分散し、本来のテーマである「意識とは何か」を実質的に問うことから逸れていく現状も否めない。

そもそも「意識」や「心」については、哲学思想の歴史のなかで洋の東西を問わず積み重ねられてきた膨大で深遠な知の宝庫を覗き見るだけ足りる。そこには誰もが怯むほどの価値ある諸成果がうず高く聳えている、今になって何か新しい発見でもあったのか、というのがこの問題に対する一般的な受けとめ方であろう。

前世紀初頭 Mach は感性的要素一元論の立場から物体の概念や自我の概念を「仮想的な・暫定的単位」と呼んで、物理学者でありながら哲学思想史にもその名を自ら刻んだ。この命題の意図は Bertrand Russel などの中立的な一元論からするといまだ唯物論の極限形式でも観念論のそれでもなかったが、ただ、大方の印象としては突然ここまで枝葉を落とされてしまうと、意識現象は極微の流体现象、あるいは素粒子現象へといずれ還元されてしまう運命かと危惧する向きが当時すでにあったといわねばならない。それゆえにその後の物理学的に真なるものと哲学的に真なるものとをめぐっての重層的な接触・抗争・妥協の歴史は現代の科学思想に大きな「影」を落とし続けている。何といっても、われわれのマクロな世界では古典物理学的熱力学の真理は生きている、「意識」が宿るとされる生命体は分子レベルの有機的連関によって支えられている、いや、それらの根底には実は波動がある、粒子があると「真理」を主張しても、他方は上記の知の宝庫を開扉してみせるだけで泰然としてよいのである。このように、「意識」は物理的ミクロレベルで生じるのか、それとも分子レベルなのかの問いは唯物論者のものであり、心的な存在でもあるわれわれにとっていずれも実感に反する問いにすぎないというのが一般的かもしれない。だが、現代物理学に根ざす「自然の階層性」の概念や、意識現象に潜む法則性の解明に使用される電磁気学、量子力学そして量子電磁力学をも視野に入れたとき、われわれの心身相関についての認識は新たなステップアップを余儀なくされるのも事実である。

1.0 さて、ここに3枚の絵(!)がある。図2)は René Magritte の Not to be

reproduced で、後ろ向きの青年が鏡に向かっている場面である。しかし、鏡には彼の後ろ姿がそのまま映じている。図4)は Leonardo da Vinci による周知の The Last Supper で、ユダの謀略を察知するキリストの姿が描かれている。そして、図1)に劣らず少々異様な図3)は Mach's view of the world で、長椅子に座り右目を閉じた Mach が左目だけで見える前方の室内光景をスケッチしたものである。

3点の絵に関して、Magritte の絵は正しい鏡像ではない、正面の像に描き直さねばならない。なぜならこの絵はわれわれの論理的必然性にも自然的必然性にも従わぬ虚像にすぎないからである。次に、da Vinci の場合はどうか。これについては遠近法のルールに則って観る者の注意を中央のキリスト像へと収斂させ、場面の異様な緊張感、すなわち正邪の観念が使徒たちの脳裏で揺れ動く状況を描ききっている。では、Mach の手になる自らの視空間のスケッチはどうか。顔面の一部を含む限定的視野からのやや歪んだ物理的室内空間が描かれているにすぎない。だが、反論もあろう。たとえば、これらのそれぞれの時空間は意図的に反転させられていたり、視野が自然に拡張されていたり、また最後の絵は逆に部分的に敢えて隠蔽されているのである、と。「最後の晩餐」が唯一われわれの視覚に適合するように見えるのは否定のしようもないが。

1.1 ここで意識空間と認知空間の区別を導入する。Chalmers は「意識」と「認知」の「構造的コヒーレンス」について論じていた。「意識」そのものの物理的相関物を探し求めるのではなく、「意識」と「気づき」のそれぞれの構造が互いに精神物理的な相関関係にあるものとされる。「意識」は「気づき」と結びついたハードな機能構成から生まれる、しかし、そうした「機能構成」に尽きるといってはいないと付言することも忘れなかった。これが「構成不変の原則」、つまり、「気づき」とは別に「意識」そのものがある物理的システム（機能同型体を含む）から生まれるが、物理的状態ではなく、「意識」はまたきめの細かいソフトな「機能構成」から生まれるが、かといって機能状態でもない、機能状態ではなく、物理法則の付随性法則である精神物理的法則が可能にする非物理的特性、前者に付加された特性であるとする見解に続く。冒頭に掲げたように、彼は現象特性としての「意識体験」という言い方で認知的判断以前の新たな次元を示唆している。ここで、中立一元論的な観点と現象学的な観点が微妙に絡むので確かに理解しづらい。Chalmers は自らの立場を「自然的二元論」ないし「特性二元論」と称し、「意識」の超越論的議論から距離を置く姿勢を一貫させているが、「特性」(properties)とは何か、限りなく量子論的な領域に接近するかに見える彼の「情報」概念はアルゴリズム的なものなのか、それとも実体的なものなのか、などの疑問がわく。Chalmers 批判は次号で行う)その真意を探るためにはどうしても Russell や Husserl の思想を検討しなければならなくなる。とりわけ「クオリア」にかかわる彼の見解および情報理論への言及は脳科学領域と重なり合う段にならざるをえず、そこで主張の論旨が不鮮明さを増すからである。量子論から一定の距離を取る姿勢、細胞・分子レベル領域への態度表明がないこともそれに一役買っている。

1.2 Russell は知覚、内観、記憶、知識の概念に頼るいわゆる「心」の定義を批判する、というより信じない。それらは「知識反応」として括られる。彼は現代物理学と自らの哲学的立場とを矛盾なく接合することに腐心した。心と物質は両方とも心的でも物質的でもない、より原初的な素材から成る構造であるという見解を基軸にして、Mach の「感覚の分析」や William James の「根本的経験論」の系譜に属する自分の立脚点を確認した。心的実体と物理的実体の分離というデカルト的枠組みを根底からぐらつかせる表明である。物質は時空の「点」と同様に、出来事 (events) から論

理的に構成され、したがって前者は後者に還元される。つまり、出来事の語彙を使って物質が何であるのかを余すところなく説明できるとするのである。数学的に同等な Heisenberg-Schrödinger 理論、あるいは De Broglie-Schrödinger 理論の受容は彼にとって決定的であった。

1.3 光量子を放射する中心の物質は円の中心点と同様に理論的構成物、即ち虚構であり、何がそこに存在するのかと尋ねるならば、それはエネルギーの放射という出来事である、と答えるしかないような「何ものか」であり、また物質とはこのエネルギー波自体の運動、すなわち波動であるが、この波動が「物質」の波であるとは言えない。波動は放射と同様に出来事である。物質を物理的実体概念として考えたアリストテレス以来の伝統は崩れたのである。ここから必然的に感覚の原因としての物質の位階も揺らぐことになる。物質は事物であることを止め、出来事から成る複雑な論理的構造間に成り立つ関係の単なる数学的特徴でしかないということになる。「心」の概念も当然批判される。1.2 に掲げた知覚その他の概念は、Russell にとって心的な個々の能力や特徴なのであり、その因果関係は物理的観点からも心理学的観点からも機能として分析できるゆえに、けっして純粋な実体的な心的範疇（このようなものがあるとすれば）に帰属させるわけにはゆかない。たとえば記憶は生体の遺伝情報として、内観は感覚与件に関する知識として、上記の諸観点からの分析対象となりうる。ここで感覚与件とは音、色、形、大きさなどの知覚内容を意味する。これらは心的にも物理的にも成りうると Russell は捉える。彼が心的とみなすものは内観的直接知を通してわれわれが知る知覚内容である。これらは物理的観測対象としても存在しうるというまでもない。見知りによる内観知識は出来事の心的側面であるとするのが正確な表現であろう。

1.4 Russell にとっての「心」が実は Chalmers の言う「認知」概念に近似していることは後で示すが、われわれのシェーマにとって視野に入れておくべきは Edmund Husserl における「心」の概念であるが、彼の著作から「心」の概念の明確な定義を見出すことはできない。今は暫定的に「意識の志向性や現前作用が働く主観的な時空間」としておこう。ここでは特に志向性の概念と超越論的自我に立脚した「意識」について取り上げる。そうなれば、ノエシスーノエマ構造への言及も避けられないのは当然である。

Husserl は周知のように世界の客観的な実在性（世界信憑）を括弧に入れ、われわれが現に志向し知覚しているそのままの経験に立ち返ることを要請する。表象の外部に知覚対象が実在していると信じるようなわれわれの「自然的態度」の取り止めを求めるのである。次項で扱う Mach 的表象世界（直接経験）のことである。こうした判断中止は超越論的還元と呼ばれ、還元された光景へとわれわれを引き戻すことが意味されている。なぜそのような引き戻しが必要かといえば、われわれは自然的傾向としてそうした光景のなかで知覚対象を超越・存在にまで構成し、それを実体化してしまうからである。

1.5 心理現象と物理現象を隔てる境界線はどこにあるのかをめぐる問題は中立一元論の立場においては生じない。しかし志向的体験を「意識」と捉え、意識作用の根幹を志向性と見る判断基準を手にした Husserl は、この概念を丁寧に彫琢していった。そこで「現象」という概念（現出者と現出を同時含むゆえ）を抑制的に使用しつつも、多くの場合それを「体験」の概念に置き換えた。「現前化」という心理学用語は保持しつつも、むしろ志向性を有する心理現象を端的にそう呼んだのである。つまり、心的/

／物理的の区別において、本来心理学的な概念である「現前化」を使用することから生じる循環を避けたのであり、その際現出から現出者へと突破する意識の働きを「作用」と呼んだ。感覚・経験は諸々の現出に、知覚・体験は理念的な現出者に対応する。したがって、ひと口に心理現象と言っても、志向的でない体験（現象的色彩ないし色彩感覚）もあり混同されがちである。

1.6 Mach 的世界の光景は Husserl の視点からは単なる物理現象ではなく、直接経験、すなわち志向的体験=意識そのものの本来のあり様と解釈される。すなわち超越論的還元の模範例である。と言っても、Mach 自身はこの場面をそのような意図のもとに描いたのではなかった。スケッチを見ると確かに対象としての部屋の内部を主題的に意識しつつ描いたのか、それとも非主題的に意識していたのかは判然としない。つまり、「見ている我」と「見られている光景」の志向的体験の質は平衡を保っているような外観を呈しているのである。われわれの自然的態度（周囲世界における態度）は、視野内の事物、壁や床、さらに窓外の景色も含めてほぼ同じ鮮明度で捉えられており、しかも遠近法のルールに従っていることもあり、このスケッチを部屋内部の断片的だがまっとうなものといわれわれに受け取らせるのである。ここには髭や鼻は見えるが「自我」は描かれていない。Husserl にとって主題的／非主題的問題は「地平」の概念とかかわるとされる。

1.7 直接経験、すなわち志向的体験=意識そのものについてはここでは深く立ち入らないが、前段で言及した「現象」の二義性、現出者と現出に関連するノエマの意味について述べる。現象が二義的に見えるのは意識にとってある意味で自然のことである。われわれは現出者と現出を同時に観察することはできない。しかし、われわれは超越論的還元によって、すなわちアポストリオリに経験から抽出される直接知によってその二義性を乗り越えることができる。ノエマとは現出者と現出とが意味（記号）レベルで一体的にとらえられる限りでの現出者のことである。ノエマ的意味の集まりは1つの基体に収斂し、そこにノエマ本体が構成されるのである。ここで働く直接経験・直接経験=意識作用の側面を特に意味する場合にはノエシスと呼ばれる。われわれのシエーマには時間軸があるが、知覚的ノエマの時間的・空間的位置は常に「今・ここ」であり、想起的ノエマのそれは「過去」である。これは個体を可能にする直接経験=志向的体験の成分である。ノエマからはアプリアリな成分として数や意味が抽出される。外的知覚と内的知覚（反省）とは同時に成立せず、反省は事後確認的・事後構成的であることがそのこととかかわっている。われわれの原印象的現出は把持された現出へ移行してはじめて反省されるからである。これは、Chalmers が別の観点から一次内包と二次内包のテーマとして取り上げていることと近似している。しかし、Husserl の唱える意識のノエシスーノエマ構造は精神力動的な性格を帯びている。前々論文で話題にした「キネステゼ意識」は志向的体験の自己運動的な構造である、という認識はこれまで上記のような関連では取り上げられておらず、再考の余地ありと思われる。知覚と感覚、身体的なもの（das Leibliche）の次元についての思索は彼の現象学全体に毛細血管のように張り巡らされていることに気づかれずに今日まで経過したことは残念ではある。彼は温和な学術語と鋭利な日常語で語る。

1.8 シエーマにおける交合円錐は現象的時空間と認知的時空間をその内部にもつ。この複素2次元空間の中心に「わたし(x)」が立つ。3枚の絵のうち、Magritte のものが鏡像としての「他者」を映しているので参考になる。

この絵の分析の詳細は次号に譲るが、ここで今必要最小限のことは述べておくこと

にする。テーゼは、「意識はその表象のなかに自分自身とは別物を見るのであるが、この別物のなかには、意識が自ら投じたものしかない」である。つまり、「意識はこの別物（他者）において、自らに対して自己を隠す」のである。これは「相互隠蔽性」という意味も込めてのことである。さらにいえば、「想像的なもの」(J. Lacan)、すなわち Husserl 流に <reell> なもの = 「実質的なもの」の世界の本質は二者関係、鏡面における二重化として、すなわち意識とその別物（他者）とのあいだの無媒介的な対立である。自分自身をたえず探し求める意識は、さまざまな物を映し出す鏡のなかに自分自身がいると信じ、ついには自分自身でないもののなかに自らを失うのである。自分自身に立ち向かうためには何が必要か。2項対立から媒介的な3項関係への移行に必要なものは何か。象徴的なもの、<ideell> なもの = 「観念的なもの」(B. de Spinoza)、超越論的存在者である。S. Freud 流に言えば、この意味において要請される媒介的存在者は「超自我」に相当するであろうが、以上のことはすべて交合円錐の右半分で生じることである。「理解」に先立ち、意識のもつ自己言及的特質の源泉であり、現前化のアプリオリな直感能力でもあるイマジナチオ（想像する精神の目）はわれわれにとってより根源的な能力と考えられるが、そこから一步踏み出さねば鏡像の本質は分かるまい。

1.9 Husserl における「他者」は、間主観性の問題とも絡んでくるが、端的に言えば「他の超越論的主観性(y¹)」のことである。シェーマでは「自我の軸」によって表示される意識の統覚概念領域で生じることである。この軸が「超越論的」であることにより、x という「私」は y¹ という「他者」とともにこの意識構造の内部に存在することが意味されている。両者は互いに「超越的」関係にはない。Magritte の絵に象徴的に現われているように、われわれの意識構造の基底にある相互隠蔽的特質や自己言及性については今回は示唆するにとどめる。後に述べる段になれば、精神分析学的観点からの鍵となる論述をいくつか参照するであろう。

2.0 シェーマの左右に表示された「理念的領域／実在的領域」と「実質的領域／観念的領域」の意味を見定めておくことは重要である。意味志向性をもつ実在的／実質的事物空間としての「現象空間」内で、それらの領域はある事物存在が「意識」へとそれぞれ異なった相転移を繰り返す、あるいは同じことであるが、「これであって、他ではない何か」としての認知対象がそれとしてとめどもなく同定される現場なのである。後にこのことは量子論の観点から、「量子コヒーレンス」と「意識」の問題として取り上げられるであろう。

さて、上記の対の2組はそれぞれ対立関係にある。そしてまたそれぞれの内部においても対立する。シェーマの左右の中心に自我の軸が通っているが、これが全体の統覚的中枢と措定されている。すなわち、理念的領域とは無時間的な普遍の本質に関する領域（論理的・数学的普遍性の領域）として実在的領域、いわゆる「物理的な実体の時間的領域」に対立するし、観念的領域は理念的領域と同様に無時間的であるが意識・主観の本質に関する領域として実質的領域、つまり「志向作用や感覚与件を体験成素としてもつ思念の領域」に対立する。ただし、観念の対象は Husserl において「精神力動的なもの」として特徴づけられる。この対象はそれ自身が反省的志向の対象として再び内在的に体験されることのできないような、超越的な成素であることを捉えておく必要がある。超越的自我不是超自我の概念と重なるのではないかと推測することはある意味で正当化されよう。

以上が眼前にある3枚の絵（Mach のものはスケッチだが、その「虚構性」をいいたいがためにあえてこう呼ぶことにする）の分析と関連づけとシェーマ理解の前提となる諸概念についての概説である。これによって、以後の叙述の方向性がある程度見えてくると

思われる。とりわけ「意識」を論じるときに無視できないことは、その身体空間との関連である。シェーマから読み取ることができるが、これはユークリッド空間とは別物である。ここが起点となる。

この導入部にはアフォーリズム風なスタイルを用いた。論理は蛇行するし、ときには落差も生じるかもしれない。心身問題は1つの主義主張によっては処理しえないゆえに、冒頭で触れたように多くの支流を形成する。しかし、本論での注意の焦点は常に3枚の絵に据えられる。むしろ、照明の角度は自在に変えつつも、(よって左斜め上方60°とは限らないが)適切に短く、鋭く光をそれらに当てることにより Rembrandt の「光量子」のような効果が出ればと願っている。これら3作品はそれぞれ3様に「意識の現象空間」において現出する射影である。

【本稿および次号のための参考文献】

- David J. Chalmers : The Conscious Mind (1996)
 Philosophy of Mind (2002)
 The Character of Consciousness (2010)
- Antonio Damasio: Ich fühle, also bin ich (2000)
- Daniel C. Dennett : Consciousness Explained (1991)
- René Descartes: Principes de Philosophie (1996)
- Henri Ey: Consciousness (1978)
- Sigmund Freud: Die Traumdeutung (2007)
 Das Ich und das Es (1976)
- Edmund Husserl: Logische Untersuchungen (1992)
 Cartesianische Meditationen (1992)
 Ideen zu einer reinen Phänomenologie (1992)
- Alain Juranville: Lacan et la philosophie (1984)
- Emmanuel Kant : Kritik der reinen Vernunft (1998)
- Stuart Kauffman: Investigations (2000)
- Christian Klicpera/Paul Innerhofer: Die Welt des frühkindlichen Autismus (1999)
- Christof Koch: The Quest for Consciousness (2004)
- Jacques Lacan: Ecrits (1966)
- Benjamin Libet: Mind Time (2007)
- Ernst Mach: Analyse der Empfindungen (1991)
- Roger Penrose: The Emperor's New Mind (1989)
 Shadows of the Mind (1994)
- Maurice Merleau-Ponty: Phénoménologie de la perception (1945)
- Karl R. Popper: Quantum Theory and the Schism in Physics (1982)
 Knowledge and the Body-Mind Problem (1994)
- Karl R. Popper/John C. Eccles : The Self and Its Brain (1986)
- Bertrand Russell: Outline of Philosophy (1979)
- Jonathan Shear: Explaining Consciousness—The 'Hard Problem' (2000)
- Max Scheler : Formalismus und Apriorismus (2000)
- Benedictus de Spinoza : Die Ethik (2002)
- Francisco J. Valera/Evan Thompson/Eleanor Rosch: The Embodied Mind (1993)
- Viktor von Weizsäcker: Der Gestaltkreis (1997)

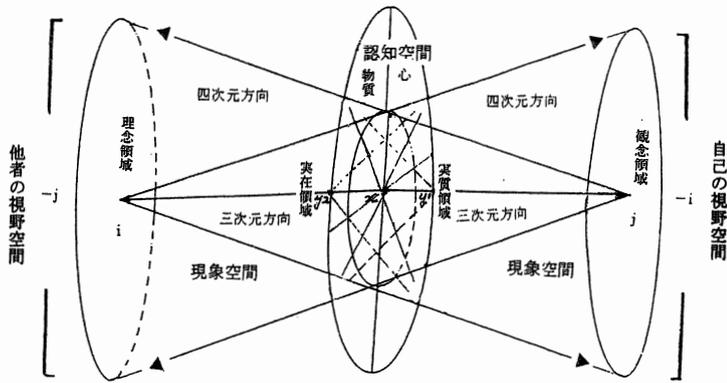


図1) <意識の構造—交合円錐>



図2)



図3)

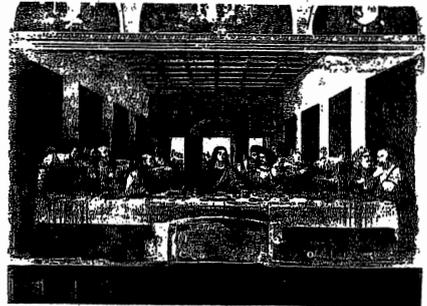


図4)

(たなかつよし 心身論/医療コミュニケーション論)